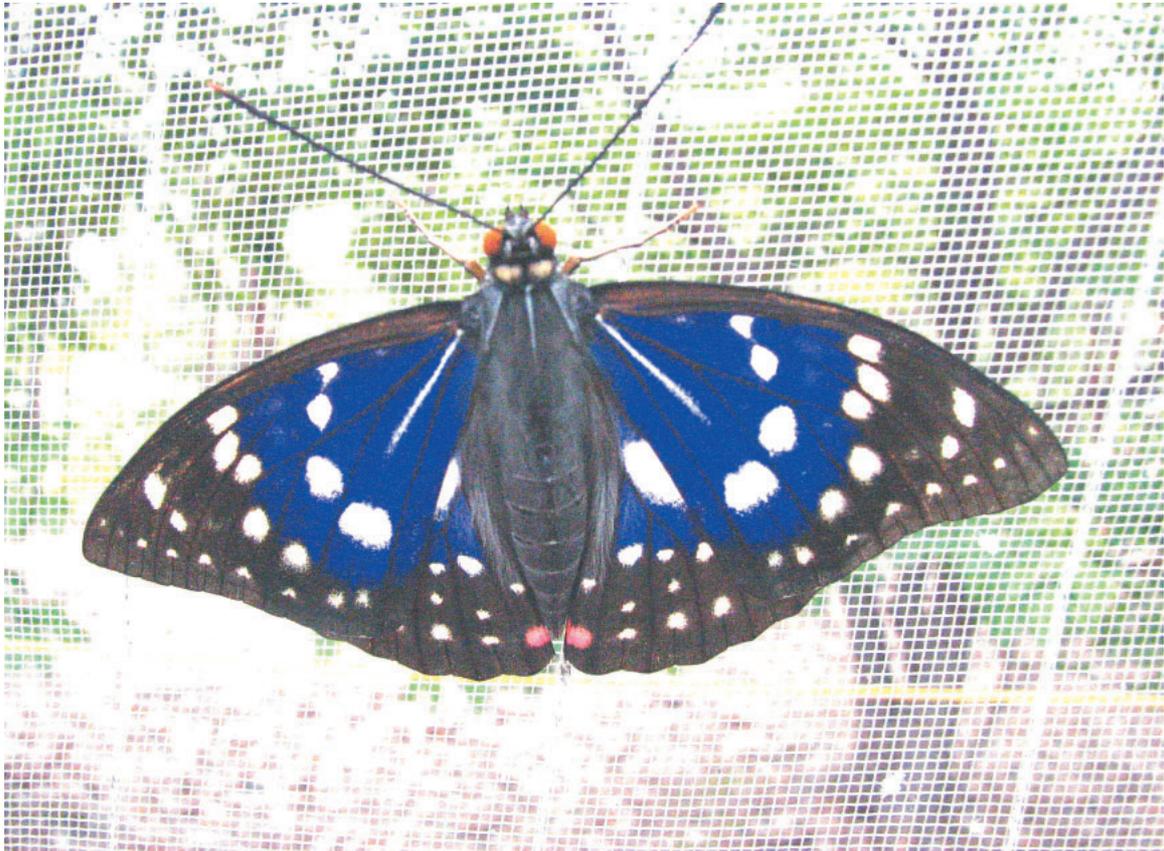


すいはく 博物館だより

No.38



1町5村のアーカイブ「吹田 いま・むかし」第3期

「吹田市の自然物語」

平成21(2009)年7月18日(土)～8月30日(日)

オオムラサキは、体長10センチメートルの大型蝶です。オスは美しい紫色で、日本の国蝶に指定されています。分布は日本、韓国、中国、台湾、北ベトナムまで。エノキの多い雑木林に生息しますが、里山の荒廃とともに数が減り、環境省のレッド・リストに準絶滅危惧種として記載されています。空高く舞う勇壮な姿を惜しんでか、最近では各地で保護や飼育が盛んになっています。

吹田市立博物館では昨年末、兵庫県丹波の森公苑から幼虫を譲り受け飼育を始めました。順調に成長し、6月3日に、最初の一頭が羽化しました。吹田では、これまで捕獲の記録はなく、オオムラサキが舞うのは100年ぶりくらいのことではないでしょうか。

緑のある風景



千里山高塚から佐井寺を望む

吹田市は北摂の山を背景に、丘と平野からなる平坦地に位置しています。現在は住宅が立ち並んでいますが、植物に注目してよく観察すると、さまざまな要素が混在していることがわかります。この複雑な植物の組み合わせは、歴史的に3つの段階を経てつくられてきました。

第一段階は、シイ・カシなど常緑の照葉樹林が広がっていました。そこに、6000年前頃から人が住み着いて、森を伐りひらいていきました。

第二段階は、約3000年前に大陸から水田稲作農業が導入されたことではじまりました。人口が増えて大きなムラがつくられ、平野には水田がつくられ、丘陵はクヌギやアカマツの落葉樹の林に変えられました。

第三段階は、明治時代からの近代化のなかでおこりました。とくに、1950年代からの動きは急激で、水田を埋め立て、丘を削って宅地をつくり、木を植栽した都市景観があらわれたのです。その結果、森の生活と集落—水田—里山という従来の日本の風景は寸断されて生態系がくずれ、消滅の危機に追い込まれているのです。

生態系とは植物を中心に人や動物がバランスを保っている自然界のシステムです。気候変化などの自然の力に影響されるのですが、最近では、人間による干渉が大きな問題としてとりあげられています。それは、現代の社会が機械や薬品を使って環境を変えたために、生態系が従来のバランスを失っているからです。

いま、わたしたちは健全な生態系をもつ未来の自然をつくるために、歴史を踏まえながら新しい戦略を練り、それを実践する段階に立っているのだと思います。

吹田にはどんな動物がいたか



イノシシ 山田川にて



キツネ 旧日生社宅地にて



タヌキ 高町池にて



カヤネズミの巣 千里北公園にて

吹田にはどんな動物がいたのでしょうか。キョウリュウがうろついていた可能性もあるし、ゾウやワニがいたことは、化石が出ていることから確実です。しかし、いま見る動物は、氷河がおわって海面が上昇し、日本列島が孤立した時に残された動物群が、淘汰をうけて形成されたものです。

主体となったのは、クマ、イノシシ、シカ、カモシカで、縄文時代から食、薬、道具、衣類などに利用されていました。オオカミ、キツネ、タヌキ、ウサギ、イタチ、サル、ネズミ、そしてヘビ、カエルなども。イヌは早くから家畜化されていました。これらの動物は、神話や民話によく登場するので、ヒトとの付き合いが深かったことがわかります。

弥生時代以降は大陸から日本へたくさんの方が来ましたが、いっしょに動物もやってきました。家畜のウマ、ウシ、そしてニワトリ。ほかに、コイ、キンギョなどの魚、コメや果樹、野菜とともに、イチモンジセセリやモンシロチョウなどの害虫や寄生虫まで来ています。

時代が進むにつれて、移入される動物の種類がふえ、原産地の範囲が広がっていきました。ペットや食料として積極的に輸入されるもの、貨物や人に付着して入ってくるものもあります。自然に死に絶えるものもありますが、野生化して生息域をひろげ、人や農作物に危害を加えたり、環境をあらすことがあります。現代は外来種と在来種が生き残りをかけて激しく衝突している段階だ、といえるでしょう。

景観の変遷

〜地図からよみとる〜

特別展示室の中央部いっぱい、畳9枚分にのばした「1961年千里緑地とその周辺」の大地図を置きます。まわりを歩きながら、写真を中心に昔と今の景観がどれほど大きく変わったかを見るのが目的です。ほかにも、ヒメボタル、大木、古建築、石碑、彫刻、歴史に残る出来事など、みんなのアイデアを取り入れ、この地域を実感しながら楽しめるものになりたいと思います。



1956



野口昭雄撮影 1956（昭和31）年5月

2009



奥居武撮影 2009（平成21）年6月

53年後

左は、小野原街道のにごり池から南南西（弘済院方面）を撮影したもの。右写真は、現在のような。埋め立てられた池のところに「あいほうぶ吹田」があります。

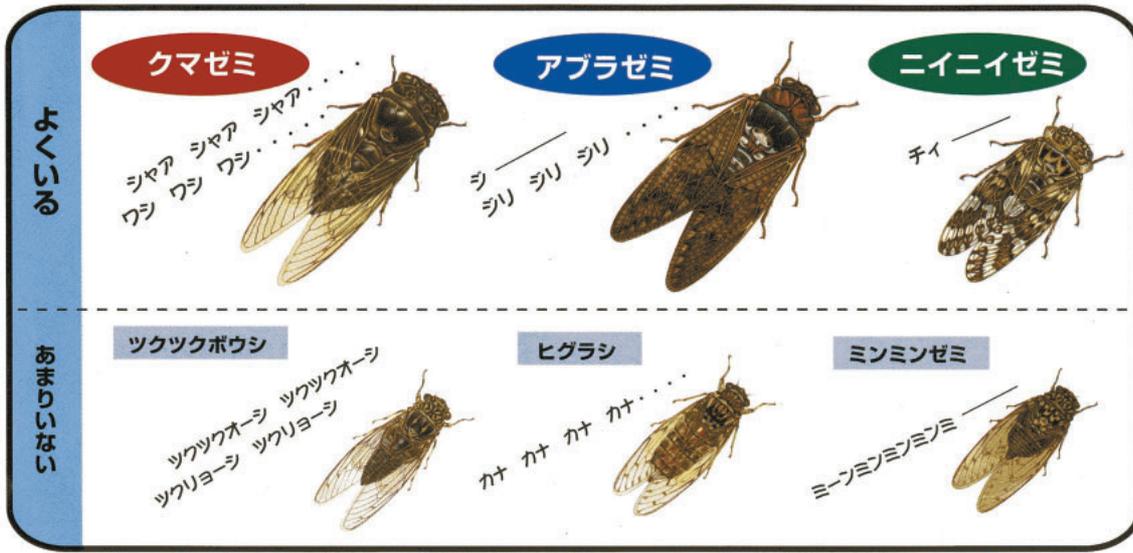
ヒメボタル

ヒメボタルは、体長7～9mm程度（ゲンジボタルやヘイケボタルより小型）の陸生のホタルで、幼虫時も陸生の巻貝（カタツムリ・キセルガイなど）をえさにして成長します。発光は、千里緑地や千里山高塚で、5月中頃から6月中頃にかけてみられます。

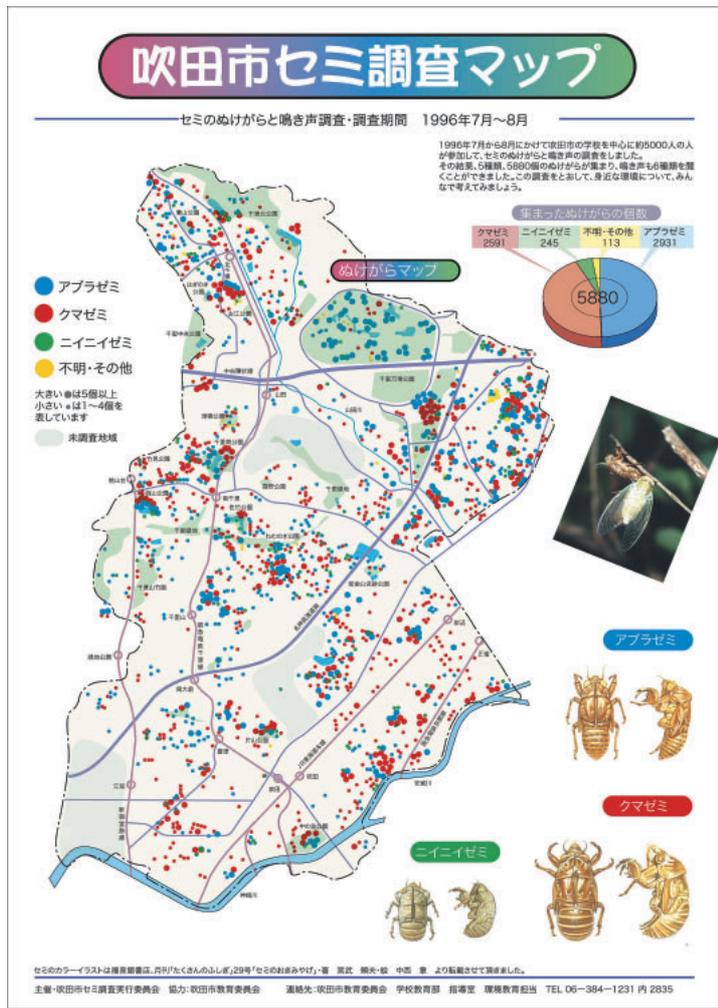


西山田ヒメボタルの会・吹田自然観察会・すいた市民環境会議では、1998年から毎年5月1日より発光がみられなくなるまで毎日、発光数の調査をつけています。

セミのぬげがらを博物館へ持って行くころ！



吹田では、アブラゼミ・クマゼミ・ニイニイゼミ・ツクツクボウシの4種類のセミを主に見かけます。シャワシャワとうるさく鳴き、羽が透明で大きいのはクマゼミです。熱帯性のセミで、都市化した環境の中でふえています。気温の低い関東以北にはほとんどいません。ジイジイ鳴くアブラゼミは、茶色の羽で全国に分布しています。クマゼミより緑地の多いところや湿った土が好きです。どちらのセミが多いかで、緑地の多少がわかります。ニイニイゼミやツクツクボウシは、もっと緑地のある自然林を好むので、吹田市では発見数があまり多くありません。



30年前までは、クマゼミは大阪では少なく、子どもにはなかなか捕れないセミでした。しかし、現在では大阪市内の大阪城公園や長居公園では90%以上、吹田市でも半分くらいをクマゼミが占めています。

長い幼虫時代を地中ですごしたセミの抜け殻を

オスとメスの見分け方

あつめて、その区域の環境を調べてみましょう。

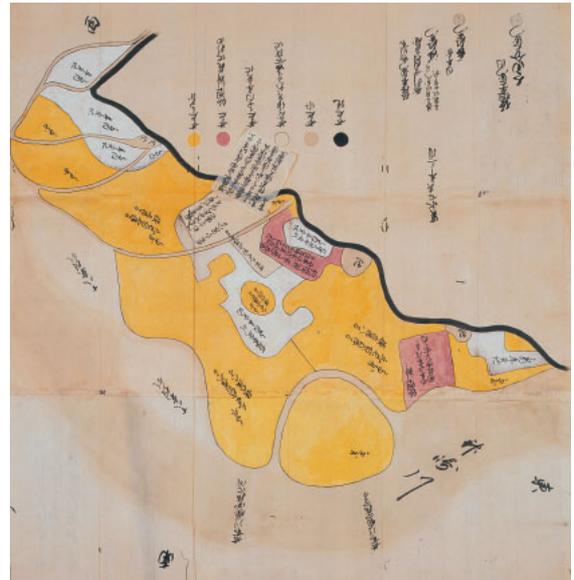
オス
メス
たてにわれめがある

開拓の努力

水田開発

日本人にとって米は主食であるとともに、貨幣とおなじ役割をもっていました。江戸時代の藩の領地が石高であらわされていたことからよくわかります。

吹田では神崎川堤防外の湿地に水田の開拓が営々と続けられてきました。右の絵図は宝永7（1710）年に描かれた、神崎川の堤防の外にある葭地よしちの開発計画図です。白と桃色はすでに水田になった場所、黄色部分が流りゅう作場さくばとよばれて作柄がよければ課税される場所です。五反島、萱島などの字名からみて、かつては中洲だったことがわかります。明治時代の地図では水田になっていますが、その後埋め立てられて現在は工場や倉庫がたてられ、古い堤防は道路になっています。



摂州神崎川筋吹田村葭地開発絵図



赤線は絵図の範囲

丘陵開発 いま・むかし

天保4年（1833）年の山田中村絵図は、千里丘陵の開発の様子がわかります。谷筋や斜面に田畑がつけられました。貨幣経済化が進んだ江戸末期は、市場の需要にすばやく対応できる野菜、茶、青物、菜種、桑、筍などの換金作物が盛んになっていました。畑作物は市場の需要に素早く対応できる利点があり、吹田をはじめ大坂近郊の村人の重要な現金収入源になっていたのです。

地形や水利を慎重に考えながら開発をすすめていた時代にかわって、



摂津図嶋下郡山田中村絵図

現代は機械力を利用して平坦地をつくり、あたらしい居住空間をつくっています。環境が一変して生物多様性が失われ、外来生物の侵入も心配なのですが、時の経過とともに、新しい生態系が生まれてくるはずです。これから、何を守り、何を育てて、健全な生態系をつくることを真剣に考える時がきていると思います。



千里ニュータウンの開発



垂水神社

守られた森

コンクリートや新建材で作られた建物が立ち並ぶ町のなかに、こんもりとした森が島のように残されているのはよく見る風景です。その多くは鎮守の森で、いま学界の注目を集めています。

村の鎮守、産土神^{うぶすながみ}の境内は、お祭り、寄り合い、倉庫、遊びの場であり、それを囲む森は神聖視され、祟りやタブーによって守られて

いました。そのため、森は高層、中層、林床の下草という、天然林に近い階層が形成されていることが多いのです。高い木は植林されたスギ、クスノキ、中層や林床には、シイ、カシが育っており、やがて照葉樹の森に遷移^{せんい}するのです。森を歩くと癒やされる気がするのですが、公園などの西洋的な明るい林と比べ、この暗く湿った原始の森は、縄文時代に先祖返りした原初の姿をもった日本人のこの場所だといえるかもしれません。

スイタクワイ



泉殿宮の絵馬

クワイは湿地にはえるオモダカ科の植物で、塊茎を食用にします。阪本寧男先生によると、スイタクワイは野生と栽培の中間的な半栽培植物だそうです。江戸時代には吹田の特産物として有名でした。いま、その復活をめざして、高校生や市民団体が、新しいクワイ料理を開発しています。

敵か味方か？ —在来種と外来種—

私たちのまわりにはゾウからウィルスまでいろいろな生物が入ってきています。人に危害を加える、農作物を荒らす、生態系をこわしてしまう心配のあるものは、法律によって禁止されています。しかし、外からやってくる生物は本当に「悪人」ばかりなのでしょうか。

生態系をこわす

アライグマ



原産地：北米
体長55cm、体重5～8kgぐらい。1962年、岐阜県ではじめて繁殖が確認されました。ラスカル人気でペットとして1970年代に大量に移入されたこともあり、野生化がすすんでいます。愛嬌のある容貌をしていますが、凶暴なところがあるので、注意が必要です。

ヌートリア



原産地：南米
体長40～50cm、体重5～9kgぐらい。柔らかい上質な毛皮をとるために1939年に移入され、その後野生化しました。西日本にたくさん生息しています。

ブルーギル



原産地：北米
ブラックバスとともに、川や池で大繁殖し、在来種の魚をたべ領域をあらして生態系を壊す魚として憎まれています。しかし、身はおいしく、料理の素材として高く評価されています。

要 注 意

セアカゴケグモ

原産地：東南アジア、オーストラリア
咬まれると鋭い痛みがあるので要注意。1955年大阪府で発見されました。その後、各地にひろがっています。吹田にも生息しています。暗い穴や石の下に潜んでいますよ。



史前帰化生物

モンシロチョウ

モンシロチョウは、童謡にも歌われる春の風物詩ですが、弥生時代に葉菜といっしょに日本に入ってきた帰化動物です。キャベツなどの葉が幼虫のえさになるので、家庭菜園愛好家から憎まれています。



クスノキ



万博記念公園のクスノキ

クスノキは、吹田市の大木調査の中でもっとも多かった木です。香りがよく木質がきめ細かくすぐれ、樟脳など薬用としても利用されているなじみ深い木です。しかし、これは在来種ではなく、有史以前に入ってきた史前帰化植物ではないかといわれています。

モウソウチク



竹林の手入れ

モウソウチクは18世紀に移入された植物です。正確な年代については異論がありますが、ひろまったのは江戸時代後期です。タケノコが大きく肉厚で柔らかいためさかんにつくられるようになりました。吹田の特産品の1つでしたが、最近では、竹林の荒廃が問題になっています。

在来種の反乱

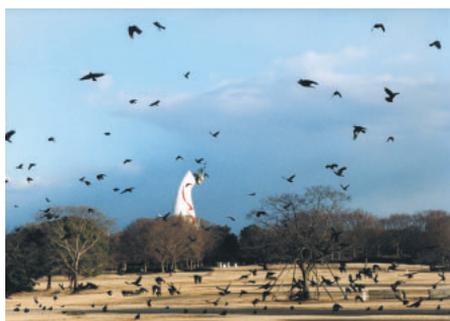
イノシシ

宅地開発や植林で領域をおかされたクマ、シカ、イノシシ、サルなどの動物たちが、里に出没して農作物などに被害をあたえ、大きな問題になっています。



山田川を歩くイノシシ

カラス



日本には、ハシブトガラスとハシボソガラスが生息しています。近年、都市部で増えているのはハシブトガラスです。果樹などを荒らすほか、生ゴミのビニール袋を上手につついて散らかし、えさを取り出すので、たいへん困っています。

万博記念公園のハシブトガラス

絶滅

ニホンオオカミ



日本の民話には、山のおそろしい動物としてニホンオオカミ（山犬）が登場します。1732年の狂犬病によって数が激減し、その後回復せず絶滅に追いやられたといわれています。

図版：『Fauna Japonica. Mammalia ; Reptilia (シーボルト『日本動物誌』)』[101/329] 京都大学理学部動物学教室所蔵より

コウノトリ ～絶滅から復活へ～



豊岡市のコウノトリ

コウノトリは、体長110～115センチのツルに似た渡り鳥ですが、留鳥としてのこっていました。明治時代以降、森林が伐採されて数が減り、1950年代からは農薬などのせいでほぼ絶滅しました。2005年、豊岡市で人工ふ化に成功し、野生にもどす試みがおこなわれています。

雑種をつくる

タンポポ

タンポポには、日本タンポポとセイヨウタンポポがあります。セイヨウタンポポの進出が激しく、雑種をつくっています。見分け方は、がくのように見える



カンサイタンポポ



セイヨウタンポポ

緑色の総苞そうほうの外片がいへんが、そりかえっているのが外来種のセイヨウタンポポやアカミタンポポです。

ガンバレ ニッポン!?

クズ

外来種をみていると日本は侵略されっぱなしのようにみえますが、そうではありません。カリフォルニアでは、kuzuと呼ばれ庭や畑に進入して、健闘(?)しています。イチロー選手みたいですね。



未来へつなぐ

子どもたちが川や野原で遊んでいる姿を見ると心あたたまります。今、私たちの生活は時間や規則にしばられ、余裕を失っているだけでなく、将来への不安がうずまいています。その原因の一つは、自然とふれあう機会が少なくなっているからだと思います。「子どもを森にかえせ」というのは河合雅雄先生の主張ですが、これは大人に対してもじゅうぶん言えるのではないのでしょうか。

これまでわたしたちは、便利で居心地のよい生活をめざして、自然環境に配慮することなく、大量の石油と化学製品をつかうことを当然のように考えていました。しかし、その報いは確実に来て、地球温暖化に代表される環境問題になり、世界的に取り上げられるようになりました。オバマ大統領はグリーン革命を宣言し、日本政府も低炭素(消費)社会への転換をはかると言っています。これからの社会はきっと大きく変わっていくことでしょう。

「吹田市の自然物語」は1町5村のアーカイブ「吹田いま・むかし」の第3期として行うものです。市民のみなさんが歴史を振り返りながら、未来のあるべき姿を考えることをねらいとしたものです。



千里北公園にて



浜屋敷見学



古江台中学校のソーラーパネル

■編集後記

今回の博物館だよりは、特別展1町5村のアーカイブ展第3期「吹田市の自然物語」の図録をかねてつくったものです。この特別展は、市民グループの協力を得て実現にこぎつけました。たくさんの写真と原稿やコメントを提供いただきましたが、写真の採用と文体の統一については編集長の責任でおこなわれました。したがって、文責はすべて小山修三にあります。

■編集委員：小山修三、高畠耕一郎、池田直子、藤田京子

1町5村のアーカイブ展「吹田 いま・むかし」

第3期「吹田市の自然物語」講演会・市民フォーラム

■講演会

7月19日(日) 午後2時～3時30分
「自然が書いたカレンダー一年輪からわかることー」
光谷拓実氏(総合地球環境学研究所客員教授)

7月25日(土) 午後2時～3時30分
「野生動物の反乱」
河合雅雄氏(京都大学名誉教授)

8月1日(土)
午後1時～1時30分
紙芝居「ヒメボタルはいまどうしているのかな」
西山田ヒメボタルの会
午後1時30分～3時30分
「吹田の自然の現状と保全・保護のあり方」
武田義明氏(神戸大学教授)
報告「千里第2緑地での里山管理」
前川光宏氏(すいた環境学習協会)

8月8日(土) 午後1時30分～3時30分
「けものと魚からみた環境ー動物考古学の視点から」
内山純蔵氏(総合地球環境学研究所准教授)
中島経夫氏(滋賀県立琵琶湖博物館学芸員)

8月15日(土) 午後1時30分～3時
「都市の生き物ー想像を超えるしたたかさー」
吉田宗弘氏(関西大学教授)
報告「吹田ヒメボタルの現状と調査活動」
吹田ヒメボタルの会

8月16日(日) 午後1時30分～3時30分
「外来種は悪者なのか」
高田みちよ氏(芥川緑地資料館「あくあびあ芥川」
主任学芸員)
「大阪のセイヨウタンポポとカンサイタンポポ」
木村進氏(大阪自然環境保全協会理事)

8月29日(土) 午後1時～2時30分
「スイタクワイから見た吹田の自然と文化」
阪本寧男氏(京都大学名誉教授)

■市民フォーラム

7月26日(日) 午後1時～4時30分
「森の木と街の木」
ー吹田大木調査の結果・知床の原生林回復への挑戦ー
共催: 知床の森トラスト関西支部・すいた市民環境会議

8月9日(日) 午後1時～3時30分
「吹田の自然と人のかかわり」
塩田敏治氏(吹田ヒメボタルの会)
小田忠文氏(すいた市民環境会議)
平軍二氏(吹田野鳥の会)
西川保氏(紫金山みどりの会)
橋本幸治氏(アジェンダ21自然部会)
林隆夫氏(吹田地学会)
美濃部剛氏(すいた環境学習協会)
高島耕一郎氏(吹田自然観察会)
阪口善雄(吹田市長)

8月23日(日) 午後1時30分～4時
「吹田の地盤と防災(断層・地震・水害)」
基調講演: 中川康一氏(大阪市立大学名誉教授)
吹田地学会

講演会・フォーラムのほかにも、楽しいイベントがたくさんあります。くわしくは、博物館HPをご覧ください。

■URL <http://www.suita.ed.jp/hak/>



ご協力いただいた方々(敬称略)

あくあびあ芥川 アジェンダ21すいた エコおもちゃ作り市民塾 (社)大阪自然環境保全協会 大阪市立自然史博物館 紫金山グリーン合奏団 紫金山みどりの会 吹田イラストレーター育成塾 NPO法人すいた環境学習協会 吹田自然観察会 NPO法人すいた市民環境会議 吹田地学会 吹田ヒメボタルの会 NPO法人吹田みどりの会 吹田野鳥の会 千里竹の会 総合地球環境学研究所内山プロジェクト 奈良文化財研究所 西山田ヒメボタルの会 日本保護協会自然観察指導員大阪連絡会 みんなのまちづくり吹田塾

上田万吉 岡崎強一 奥居武 小田忠文 加藤俊二 塩田敏治 白川治吉 高桑常子 野口昭雄 土生陽子 原美智枝

吹田市博物館だより 第38号 平成21年(2009年)7月3日発行

発行 吹田市立博物館 〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号 TEL.06(6338)5500 FAX.06(6338)9886

●開館時間 午前9時30分～午後5時15分 ●休館日 月曜日、祝日の翌日、12月29日～1月3日

●この冊子は4,000部作成し、1部あたりの単価は60円です。